

「将来に目を向ける神」

申命記 5章 8節～10節
ヨハネによる福音書 9章 1節～12節

説教 小友 聡 牧師

主イエスが通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられたとき、一緒にいた弟子たちが尋ねました。「先生、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」(2節)心無い質問です。人は罪ゆえの裁きを受け、自分の罪のみならず、親や祖先の罪をも引き受けなければならないという考え方は、旧約聖書の時代には根強くありました。

けれども、今日の聖書の言葉において、この生まれつき目の見えない人について、主イエスは弟子たちにお答えになりました。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。」(3節)そして、主イエスは唾で土をこねてその盲人の目にお塗りになり、さあ、シロアムの池に行き洗いなさいと言われました。彼は主イエスの言葉を信じて歩き続けました。聖書には書いてありませんが、彼は必死に歩いたのだ、と思います。ようやくシロアムに辿り着き、池で目を洗うと、彼の目は見えるようになりました。

今日の御言葉において、中心になる言葉は、3節の主イエスの言葉です。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。」

とても慰めに満ちた、意味の深い言葉を主イエスはお語りになりました。この主イエスの言葉、「神の業が現れるため」とはどういう意味でしょうか。主イエスは「神の業が現れるためである」ということにおいて、目が見えないことの原因は過去にではなく、未来に置かれるのだ、と言われたのではないのでしょうか。

私たちは何か思いがけない不幸、良くないことが起こると、すぐ過去に原因を求めます。過去にがんじがらめにされ、そこから逃れることができません。しかし、主イエスは、原因を過去に求めるのではなく、やがて現れる、その人の未来にこそ目を向けさせるのです。これから、あなたは祝福を受ける時が必ずやってくる、そのすばらしい未来に出会うために、あなたは今、この不幸を身に受けているのだ。主イエスはそのように言われたのではないのでしょうか。この盲人は、主イエスの言葉を信じて、見えないまま、手探りで、道を前へ前へと進んで行き、その苦勞の果てに、シロアムで目が開かれました。

目が開かれる、とは象徴的な言葉です。今日の御言葉は、ただ単に奇跡が起こったというだけでなく、今日、私たちにだいじなことを教えてくれます。奇跡の天才ピアニストと言われる辻井信行さん。彼は目が見えませんが、目が見えないゆえの研ぎ澄まされた音感、鍵盤に触れる指先の並外れた感覚、演奏へのすさまじい集中力がこの天才的ピアニストを産み出しました。

主イエスは、神の業がこの人に現れるためである、と言われました。生まれつき目が見えないという障害。その障害が不幸なものとして終わるか、それとも幸いとなるか。過去ではなく、将来こそが運命を決めるのではないのでしょうか。その将来から主イエスは見ておられます。今日の御言葉は、障害をどう乗り越えるかという問題ではありません。私たちが主イエスを信じて生きるとはどういうことかを教えてくれます。

主イエスは私たちの目を将来の、希望へと向かせてくれます。今、マイナスだと思っていたものが、何倍ものプラスに変えられる日が必ずやって来る。その日を主イエスは私たちのために用意しておられるのです。あなたは私の宝。私はあなたのために十字架にかかり、あなたのために命の道を切り開いた。さあ、私の言葉に従って、勇気を出して前に向かって歩きなさい。主イエスはそのように私たちに語りかけておられます。

あるクリスチャンの医者がおります。自らも悪性の腫瘍であることがわかり、治療を受けるようになって、やがて復職し、癌の患者さんを診断する担当医となりました。この方は、自分が癌になったことを「癌がくれた贈り物」と受け止めて、前向きに生きています。聖書に記されている通り、私たちがキリストを信じ、キリストに従うという生き方は、いつでも前向きに生きるということです。主イエスが私たちに示してくださるのは、私たちが苦しめる過去ではありません。神の御業が現れる、私たちがまだ見ていない将来です。その方向を見据えて、主の手に引かれて、歩み出す。福音に生きるとはそういうことです。そういう信仰の歩みをこの礼拝から共に始めましょう。

(記 小友 聡)